資料２

国際園芸博覧会と政府出展の概要

2022年12月
農林水産省・国土交通省

１．国際園芸博覧会の概要

国際博覧会と国際園芸博覧会の関係

- 国際園芸博覧会は、国際的な園芸・造園の振興や花と緑のあふれる暮らし、地域・経済の創造等を目的に開催される博覧会。
- 国際園芸家協会（AIPH事務局：英・オックスフォードシャー）の承認を得て行われる。
- 最上位であるA1の国際園芸博覧会は、「国際博覧会に関する条約」に基づき設置されている博覧会国際事務局（BIE）の認定が必要。

国際博覧会

BIE「博覧会国際事務局」登録・認定

BIE: Bureau International des Expositions

【BIE】
- 「国際博覧会に関する条約」に基づき加盟国の拠出金によって運営されている組織
- 170カ国で構成（令和４年５月現在）
- 本部はフランス・パリ

登録博（旧一般博）

- 1970　日本万国博覧会「大阪万博」
- 2005 日本国際博覧会「愛知万博」
- 2025　国際博覧会「大阪・関西万博」

認定博（旧特別博）

- 1975　沖縄国際海洋博覧会「沖縄海洋博」
- 1985　国際科学技術博覧会「つくば科学万博」
- 1990　国際花と緑の博覧会「大阪花の万博」
- 2027年国際園芸博覧会

国際園芸博覧会

AIPH「国際園芸家協会（民間団体等加盟）」承認

AIPH: Association Internationale des Producteurs de l'Horticulture

【AIPH】
- 国際的レベルで園芸生産者の利益を図り、園芸技術の向上を図るために設立された非営利団体
- 世界各国71の園芸・造園団体等により構成（令和４年５月現在）
- 日本では（一社）日本造園建設業協会が会員）
- 事務局は英・オックスフォードシャー

種別	A１	B	C	D
名称	世界園芸博覧会	国際園芸博覧会	国際園芸展	国際園芸見本市
開催期間	３～６ヵ月間	３～６ヵ月間	4～30日間	–
最低面積	５０ha	２５ha	0.6 ha	–
BIE承認	必要	–	–	–

- 2000 国際園芸・造園博覧会 ジャパンフローラ 淡路
- 2004 静岡国際園芸博覧会 パシフィックフローラ浜松

■ 国際博覧会と国際園芸博覧会の関係

- AIPHは、時代背景に応じて、国際園芸博覧会に求める役割を定めてきた。
- 2015年のAIPH総会において、国際園芸博覧会が成功するために必要な４つの取組と役割がAIPH規則に定められた。

国際博覧会

BIE「博覧会国際事務局」登録・認定

BIE: Bureau International des Expositions

■第115回　BIE総会決議（抜粋）

○全ての博覧会は、現代社会の要請に応えられる今日的なテーマがなくてはならない。

○テーマは、全ての参加者がそれを表現できるほどに十分大きなものであって、当該分野における科学的、技術的及び経済的進歩の現状と、人類的、社会的な要求及び自然環境保護の必要性から諸問題を浮き彫りにするものでなければならない。

（1994/6/8 第115回BIE総会にて決議）

国際園芸博覧会

AIPH「国際園芸家協会（民間団体等加盟）」承認

AIPH: Association Internationale des Producteurs de l'Horticulture

■国際園芸博覧会の目的（抜粋）

○園芸産業の製品を一般市民、企業、政府に対してPRし、個人・社会の利益の観点から、園芸に対する世界の評価を高めること（略）

■成功する国際園芸博覧会（抜粋）

○社会の健康と福祉の改善、環境の向上、経済強化のために植物の利用を促進する。

○社会が園芸を必要としていること、園芸が人と環境を結びつけていることを明確に示す。

○各国から優れた園芸が集まり、最高の知識・技術を促進し、文化・園芸の多様性を称揚する。

○園芸産業の生産性を向上し、国際協力を促進する。

（AIPH規則より、2015/10/21開催総会にて承認）

国際園芸博覧会の潮流

- 国際園芸博覧会の開催は欧州諸国からアジアや中東諸国へと拡大。
- 当初は園芸産業振興が主眼であったが、現在は園芸産業振興とともに、博覧会を契機としたまちづくりや社会課題への貢献が展開されている。

【1948】AIPH設立
共通ルールのもと展示の品質の保証された万国博覧会を開催するため、31ヵ国が国際条約に署名し、フランス・パリにおいて設立。

■ 欧州諸国で園芸産業振興を主眼とした開催

※ 以下、Aクラスの開催実績

1960 フロリアード・ロッテルダム(オランダ)

Floriada【オランダ】
- オランダ国内で10年に1回開催
- 花卉園芸産業の振興、国際見本市的要素が強い

1963 IGA・ハンブルグ(ドイツ)

IGA【ドイツ】
- ドイツ国内で10年に1回開催
- 都市の環境政策やまちづくり・公園緑地整備の促進

1972 フロリアード・アムステルダム(オランダ)
1973 IGA・ハンブルグ (ドイツ)
1982 フロリアード・アムステルダム(オランダ)
1983 IGA・ミュンヘン(ドイツ)
1984 リバプール国際庭園博覧会(英国)

出典4-1) ※巻末に資料一覧あり。以下同じ。

■ 欧州圏からアジア、中東諸国での開催に拡大

1990 国際花と緑の博覧会「大阪花博」

【テーマ】自然と人間の共生
アジアで初めての国際園芸博覧会として開催。環境問題を推進し、都市緑地の3倍増計画等幅広い戦略の一環として開催

出典4-2)

■ 博覧会を契機としたまちづくりや社会課題への貢献に展開

1992 フロリアード・ハーグ・ズータメア(オランダ)	【テーマ】 品質、技術、科学および管理の分野で継続的な更新プロセスに関与する園芸
1993 IGA・シュトゥットガルト（ドイツ）	【テーマ】 都市と自然 - 責任あるアプローチ
1999 昆明世界園芸博覧会（中国）	【テーマ】 人間と自然 - 21世紀への行進
2002 フロリアード・ハールレマミーア（オランダ）	【テーマ】 21世紀の生活の質におけるオランダ園芸と国際園芸の貢献
2003 IGA・ロストック（ドイツ）	【テーマ】 シーサイドパーク 新しい花の世界
2006 チェンマイ国際園芸博覧会（タイ）	【テーマ】 人類への愛

2012 フロリアード・フェンロー（オランダ）

【テーマ】 自然と調和する人生
会場は、持続可能性の原則に沿って開発され、自然地形を最大限に活用し、25haの既存の森林を保護した。
会場跡地は、フェンローグリーンパークイノベーションコンプレックスとして、農業・園芸分野の起業家、研究者のためのフィールドとして利用されている。

出典5-1）

2016 アンタルヤ国際園芸博覧会（トルコ）

【テーマ】花と子供達
園芸と農業での経験の共有、緑地の創出と新たな雇用機会を通じた生活の質の向上を目的に開催
会場跡地は、国際協力を促進し、農業問題に対処する知識を共有し、鍵を握る環境問題への認識を高めるための、国際的な技術・トレーニングセンターとしての活用が宣言されている。

出典5-2）

2019 北京国際園芸博覧会（中国）

【テーマ】緑色生活 美麗家園（緑の生活、美しいふるさと）

2022 フロリアード・アルメーレ（オランダ）

【テーマ】 成長する緑の都市
緑、食、健康、エネルギーをサブテーマとし、ひらめきと情報を見つけ出す体験を提供。
会場跡地は、緑の原則に基づく新たな都市の区画として整備される。

現在 ➡

2023 ドーハ国際園芸博覧会 （カタール）

【テーマ】 緑の砂漠　よりよい環境
砂漠化を食い止める革新的な解決策についての想起、周知を目的として開催。
会場は都市の歴史的な中心部に近い公園を活用。

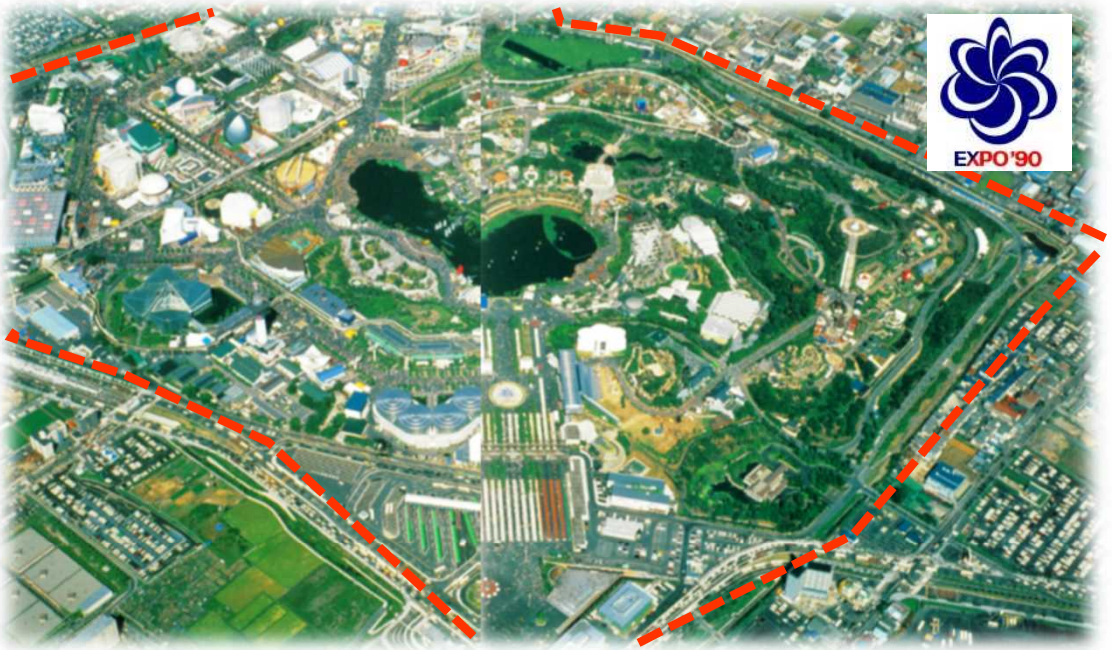
2027　2027年国際園芸博覧会（横浜）

1990年国際花と緑の博覧会「大阪花の万博」

- 1990年に大阪市の鶴見緑地が会場となった、アジアで最初の国際園芸博覧会である。政府の緑の３倍増構想、大阪市のまちづくり構想等を背景に、わが国の緑化の飛躍を目指して開催した。

開催概要

名称	国際花と緑の博覧会 （略称：花の万博　EXPO’90）
カテゴリー	BIE 特別博 AIPH A類1 大国際園芸博
テーマ	自然と人間の共生
会期	1990月4月1日～9月30日 （183日間）
開催地	大阪「鶴見緑地」
会場面積	約140ha （駐車場・関連施設等を含む）
入場者数	23,126,934人



出典6-1）

2022年 アルメーレ国際園芸博覧会「フロリアード２０２２」

- アムステルダム市近郊のアルメーレ市における埋立地での開催。将来的に低層住宅地とする計画のため、全体を192の区画に分割し、各区画の周囲4mに様々な緑化を行うとともに、環境に配慮した博覧会を目指して開催。

開催概要

名称	2022年 アルメーレ国際園芸博覧会
カテゴリー	AIPH A1クラス BIE 認定博覧会
テーマ	成長する緑の都市 (Growing Green Cities)
会期	2022年4月14日(木) ～10月9日(日)
開催地	オランダ王国アルメーレ市
会場面積	60ha
入場者数	685,189人

出典7-1）

２．２０２７年国際園芸博覧会の概要

２０２７年国際園芸博覧会の概要

- **2027年国際園芸博覧会**は、**「幸せを創る明日の風景」**をテーマに、**花や緑との関わりを通じ、自然と共生した持続可能で幸福感が深まる社会の創造**を目的として開催。
- 本博覧会では、多様な屋内外の展示、コンペティション、行催事等を通じて、以下に取り組む。
  ① 花・緑・農に関連した**最新技術の国内外での共有**による、**SDGsの達成**や**グリーン社会の実現**の推進
  ② **国内の優れた花きの魅力**や、**日本庭園・いけばな等の文化の発信**を通じた、**花き園芸産業・造園業等の発展**への貢献
  ③ 花の名所や様々な庭園をはじめとする**観光資源との全国的な連携**を通じた、**観光振興**への貢献

開催概要

位置付け	最上位の国際園芸博覧会（A1） ※我が国では1990年の大阪花の万博以来の開催
開催場所	旧上瀬谷通信施設の一部（約100ha） （横浜市旭区・瀬谷区）
開催期間	2027年3月19日～9月26日 （6か月間）
参加者数	1,500万人（ICT活用等の多様な参加形態含む） ※大阪花の万博では約2,300万人が来場
会場建設費	約320億円
テーマ	幸せを創る明日の風景 ～Scenery of the Future for Happiness～
開催主体	一般社団法人 2027年国際園芸博覧会協会 ※園芸博法に基づき国が指定

開催場所・会場イメージ

出典9-1）

出典9-2）

２０２７年国際園芸博覧会の検討概要

	国（開催国政府）	横浜市（開催都市）	協会（開催者）
2017		「国際園芸博覧会招致検討委員会」設置	
2018		「国際園芸博覧会基本構想案」策定	
2019	**「国際園芸博覧会検討会」**を設置。 **日本での開催意義、横浜市における計画案について検討**	AIPHに開催招致都市として開催承認される	
2020	AIPHに政府指示書を発出、正式承認される **「国際園芸博覧会具体化検討会」**を設置。 **BIEに計画案を提出するにあたり充実すべき事項等を検討**	「横浜市国際園芸博覧会基本計画（案）」を検討	
2021	国際博覧会に関する条約上の手続を進めることが**閣議了解**		**(一社)２０２７年国際園芸博覧会協会 設立**
2022	**園芸博法が公布・施行** 内閣改造で**「国際園芸博覧会担当大臣」**が指定 第171回BIE総会（令和4年11月28日）において、**国際条約に基づく国際博覧会として認定**		**２０２７年国際園芸博覧会基本計画案**の公表・意見募集

2027年国際園芸博覧会の検討概要

➢ 「国際園芸博覧会検討会（令和元年度）」、「国際園芸博覧会具体化検討会（令和２年度）」における検討を通じて、国際園芸博覧会を日本で開催することの国としての政策的意義や開催地の考え方、今後展開すべき内容を整理。

出典11-1）

日本で国際園芸博覧会を開催する意義

博覧会後の更なる展開

SDGs実現やグリーン社会に向けた日本モデルの実現・主流化

「環境と共に生きる」知恵・行動を世界に伝播

上瀬谷において国際園芸博覧会の理念が継承され、SDGs実現やグリーン社会に向けた日本モデルとして、まちづくりでは、ICTが活用され、グリーンインフラが実装されるとともに、農ある生活が営まれ、花と緑を介した国内各地との交流が続く。これらが国内外に広がることで、横浜国際園芸博覧会の理念が水平展開されていく。

国際園芸博覧会

「環境とともに生きる」知恵を世界に提示

・開催期間：
2027年3月～9月（6か月）

・博覧会区域：
約100ha

・参加者数：
1,500万人
（多様な参加形態を含む）

幸せを創る明日の風景　Scenery of The Future for Happiness

自然との調和 Co-adaptation　緑や農による共存 Co-existence　新産業の創出 Co-creation　連携による解決 Co-operation

SDGs実現に貢献し、その先の社会も見据えた日本モデルの提示

SDGs目標年の３年前に開催される博覧会として、これまでの取組の成果確認と総仕上げ、さらには2050年カーボンニュートラルの実現、気候危機への対応など、グリーン社会の実現に貢献するため2030年以降を見据えた多様な主体の新たな取組を共有する

デジタルによる循環型社会の提案

- ICT技術を駆使した、現実の会場での体験とは異なる魅力的な体験を提示
- デジタルを活用した環境負荷低減、循環型社会形成の提案

グリーンインフラで創る国際園芸博覧会

- グリーンインフラ技術を評価するコンペティションの開催による最新技術の共有
- グリーンインフラが実装された会場や会場設備自体を展示の一つとして発信

人と自然の関係が見える農・園芸文化

- 会場、会場周辺にて人々に実際の農の取組をみせる
- 日本の優れた花き品種や技術をアピールするコンペティション、展示内容

花と緑をテーマとする観光の展開

- 日本各地の庭園を展示し、各地の文化、観光資源等を発信
- 日本各地の観光地へのハブとして、情報発信、花と緑をテーマとする観光の展開

通信基地跡地の土地利用転換

世界的な環境変化を踏まえた国の政策の実践

- 返還施設の大規模な土地利用転換
- 国の推進する政策を踏まえた横浜市のまちづくり
- 園芸博後を見据えたまちづくりガイドラインを共有、会場整備から博覧会後まで引き継ぐ

Society5.0の推進

ICT等を活用した持続可能なまちづくり

- 会場内外の農地や研究機関等と連携し、緑化・花き園芸等に関わる最新技術を用いた生産を具体的に実践、その成果を博覧会にて検証

グリーンインフラの実装

グリーンシティ・イニシアティブによるまちづくり

- 人々と企業が繁栄する活気ある都市の創造における植物の役割を促進する「グリーンシティ・イニシアティブ」を標榜したまちづくり
- 定量的な検証に基づく基盤整備等へのグリーンインフラの導入

花き園芸文化の振興等を通じた農業・農村の活性化

花・緑・農・大地をいかしたまちづくり

- 会場周辺部も含め都市郊外部の実際の農の取組（生産、生活等）を紹介できるよう農家と連携した準備

観光立国や地方創生の推進

交流による賑わいと活気あるまちづくり

- 会場区域を様々な主体による取組の実験場として活用
- 横浜市の中心部や日本各地との連携による、園芸博を活用した全国的な誘客や発信の展開

- 気候変動等の世界的な環境変化を踏まえた国の政策を実践する場として、旧上瀬谷通信施設のまちづくりを展開するとともに、会場区域を多様な主体による新たな取組の実験場として活用
- その成果を国際園芸博覧会において、SDGs実現に貢献し、その先の社会も見据えた日本モデルとして提示
- 国際園芸博覧会の理念が国内外に継承され、SDGs実現やグリーン社会に向けた日本モデルの主流化に向け先導的役割を果たす

Society5.0の推進

緑化・花き園芸等を中心に、最新技術の実証、モデルケースの場として、人々が最新技術を取り入れていく契機となるための取組を実践する

グリーンインフラの実装

旧上瀬谷通信施設全体で定量的な検証に基づきグリーンインフラを実装させ、博覧会展示としても会場全体で先進的な取組を発信する

花き園芸文化の振興等を通じた農業・農村の活性化

コンペティション、花き品種・先進技術や持続可能な農業の展示、実際の農の取組の紹介により日本の優れた花き園芸技術や農業・農村、里山文化の重要性を発信する

観光立国や地方創生の推進

博覧会会期中の会場を観光資源と捉えるだけでなく、周辺地域との連携やPRを展開するとともに、会期前からの誘客を進める

通信施設跡地の返還とまちづくり

博覧会の開催意義が、施設跡地返還後のまちづくりにおいて、確実に継承され、ひいては国内各地に広く展開されるための取組を進める

2027年国際園芸博覧会の検討概要

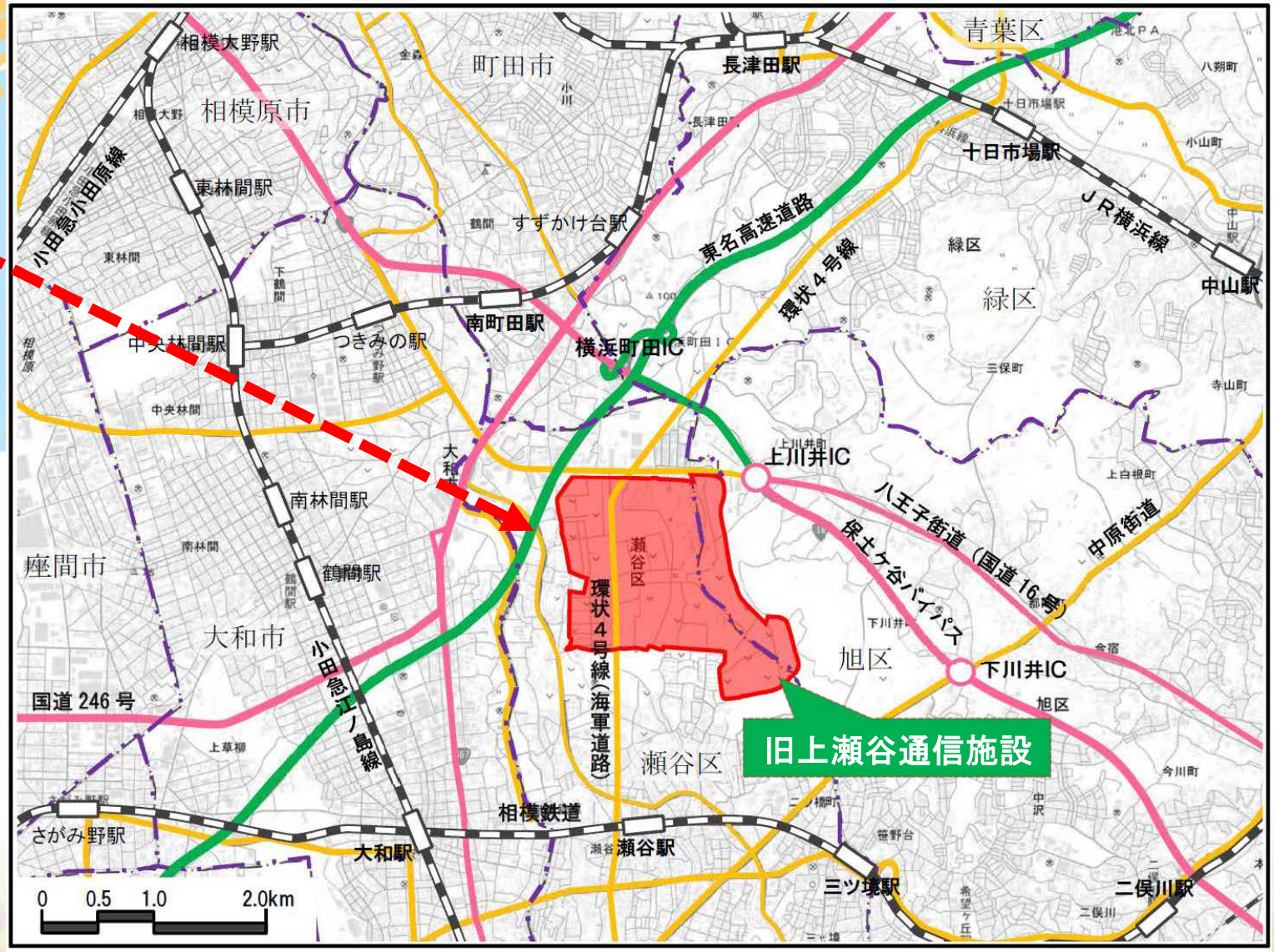
➢ 「国際園芸博覧会検討会（令和元年度）」、「国際園芸博覧会具体化検討会（令和２年度）」における検討を通じて、横浜・上瀬谷地区において国際園芸博覧会を開催することで、新たな時代における田園都市のモデルとなる期待が示された。

■横浜・上瀬谷地区で国際園芸博覧会を開催することについて

（国際園芸博覧会具体化検討会報告書より）

- 米軍の通信基地として開発が抑制されてきた歴史を俯瞰し、大規模な土地利用転換を通じて、世界的な環境変化を踏まえた**国の政策の実践の場、平和で持続可能なまちづくりの国内外への展開のモデル**の場となる
- **デジタル技術と自然環境が融合した、郊外部の新たなモデル**となる
- **都市郊外部の次世代のライフスタイルを提示**する役割を果たし、ひいては、環境に配慮した持続可能な農業の普及・展開や、**新たな時代における田園都市のモデル**となる
- **郊外部としてのポテンシャルを活かした観光体験**を提供し、国内の地方創生のモデルとなる

■旧上瀬谷通信施設の位置図



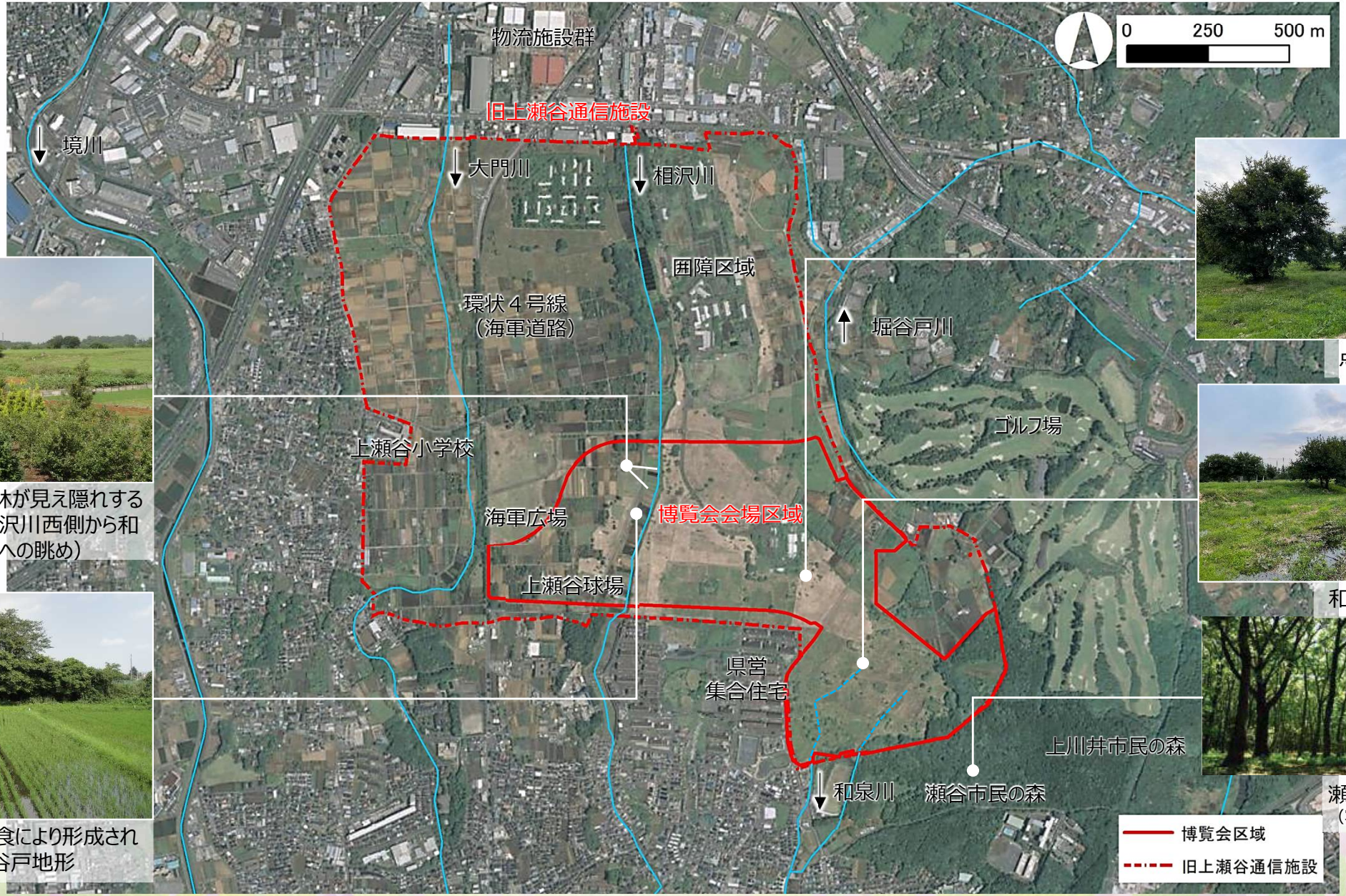
凡例
- 高速道路、自動車専用道
- 国道
- 主要市道

出典13-1）

旧上瀬谷通信施設の周辺現況

- 多摩丘陵～三浦半島にわたる緑のネットワークの中に位置し、周囲の都市的土地被覆の中で、河川、農地、樹林地からなる自然的土地被覆が大規模な平坦地において維持されている。

出典14-1）



点在する樹林が見え隠れする微地形（相沢川西側から和泉川源頭部への眺め）

多摩川の浸食により形成された相沢川の谷戸地形

点在する樹林

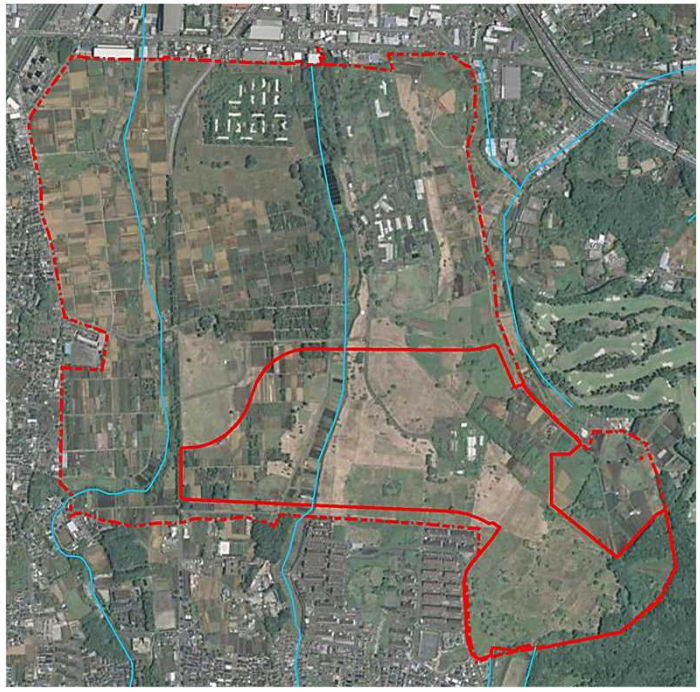
和泉川源頭部

瀬谷市民の森
（写真：横浜市）

旧上瀬谷通信施設の概要

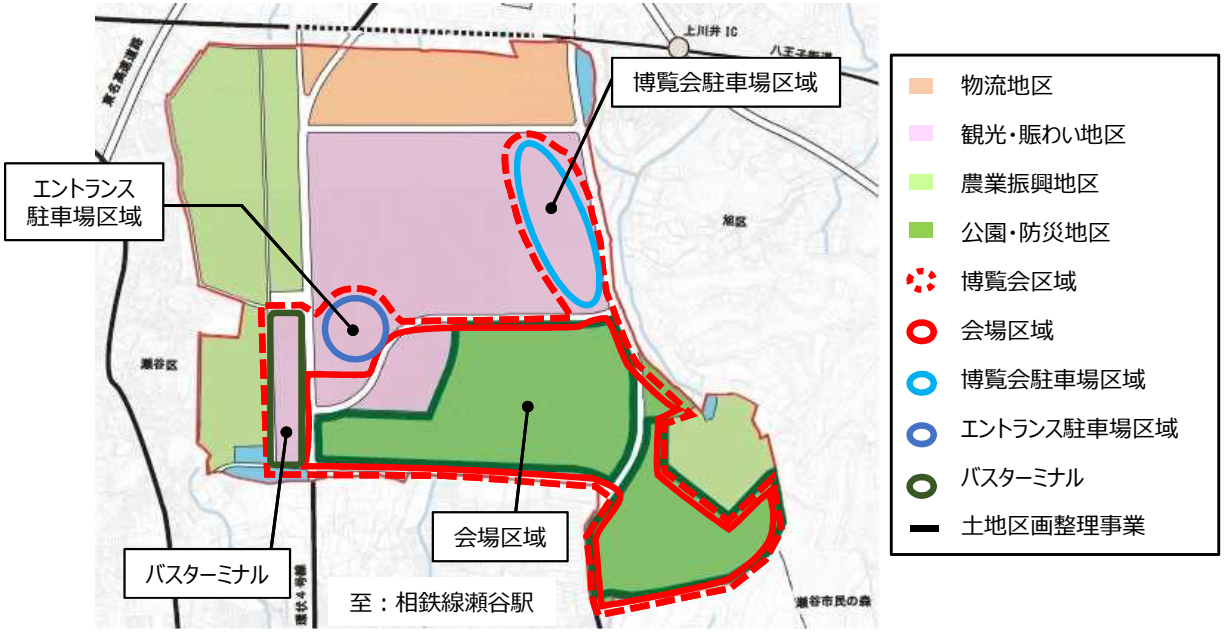
- 旧上瀬谷通信施設（区域面積：約242ha）は、横浜市北西部（瀬谷区・旭区）に位置し、**1951年から2015年の全域返還までの間、米軍施設として土地を提供。**
- 地権者によるまちづくり協議会とともに横浜市が土地利用基本計画を策定（2020年3月）し、**農業振興と都市的土地利用により、郊外部において新たな活性化拠点を形成**することとしている。
- また、当該計画に基づき、より具体的な土地利用のあり方を示した土地利用計画図（下図）を策定。
- 2027年国際園芸博覧会は、こうした**将来のまちづくりに向けた取組を推進する起爆剤**となることが期待されている。

【旧上瀬谷通信施設（現在）】



出典15-1）

【旧上瀬谷通信施設の土地利用計画図（将来）と園芸博会場区域】　出典15-2）



○**観光・賑わい地区**	テーマパークを核とした複合的な集客施設が立地し、国内外から人を呼び込む観光と賑わいの拠点を形成
○**農業振興地区**	賑わい施設などと連携した農産物の収穫体験等の他の地域へも波及する新たな都市農業モデルとなる拠点を形成
○**公園・防災地区**	国際園芸博覧会のレガシーを継承する公園や災害時における広域的な防災拠点などを形成
○**物流地区**	広域的な幹線道路との近接性をいかし、新技術を活用した効率的な国内物流を展開する新たな拠点を形成

会場計画

出典16-1）

■ ２０２７年国際園芸博覧会の概要

テーマ　幸せを創る明日の風景
～Scenery of the Future for Happiness～

サブテーマ
テーマ実現の切り口

- 自然との調和
- 緑や農による共存
- 新産業の創出
- 連携による解決

コンセプト
参加主体が目指す指針（基準となる考え方）

- 環境共生社会への挑戦
- 自然資本と技術の融合
- 風景・景観の最適化（リ・デザイン）

多様な主体の参画によりテーマを体現

庭園

- 博覧会のテーマを体現する主催者庭園の他、世界の国、自治体、企業・団体、市民団体等から各国・各地の特徴ある庭園が出展
- 各国から出展される国際出展庭園では、来場者が各国の花や緑のある暮らしや文化を五感で体感しながら回遊できる空間を創出

自然資本による都市の課題解決

グリーンインフラ

- 緑陰や風の道の形成、園路広場における雨水貯留、蒸散作用効果、良好な緑の創出による景観づくりなど、居心地の良いウォーカブルで魅力的な空間を創出

身近な食を通じて持続可能な暮らしを提案

食体験事業　Farm to Table Street

- 食の展示として、会場の大通りに多種多様な飲食・物販施設を配置し、企業や地区内外の農家と連携。来場者が旅をするように世界中の風景・食・文化、人とのふれあいを五感で楽しむシーンを創出

博覧会の象徴・圧倒的な緑による自然の体感

シンボル展示

- 博覧会の象徴として、展示・建築が一体となり、多くの人々を惹きつけ、テーマ・サブテーマを伝える

バイオフィリア展示

- 都市化により人間と自然との距離が拡大する現代社会で、来場者一人ひとりが「自分にとってのバイオフィリア」を発見できるような展示を展開

※ 人間が自然と交わりたいと望む本能的な欲求

日本の植物資源展示

- 植物の遺伝資源、伝統文化・技術、日本人の植物を使う知恵等に関する内容を展示
- 生物多様性や自然との共生の重要性等を世界に向けて発信

技術の向上　産業の発展・拡大

コンペティション

- 庭園及び花き等のコンペティションに加え、本博覧会独自企画のコンペティションを実施
- 需要拡大・輸出拡大等による我が国の花き園芸・造園産業の発展を目指すとともに、多様な産業界が連携する枠組み等も検討

産官学民連携により目指すべき未来像を具現化

博覧会協会テーマ事業　“Village”

- 博覧会協会が設定する複数のテーマに応じ、賛同する民間企業や教育機関、研究機関、市民などが共創して、参加・交流・体験等の多様なコンテンツの集合体やコミュニティを提供

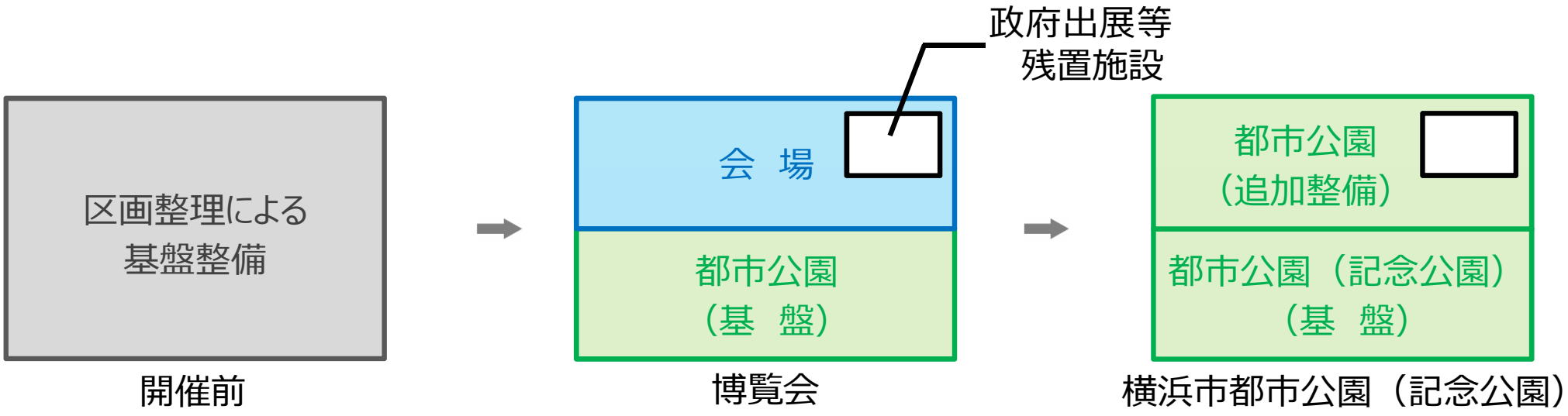
Villageテーマ（例）

Park Pavilion（パークパビリオン）

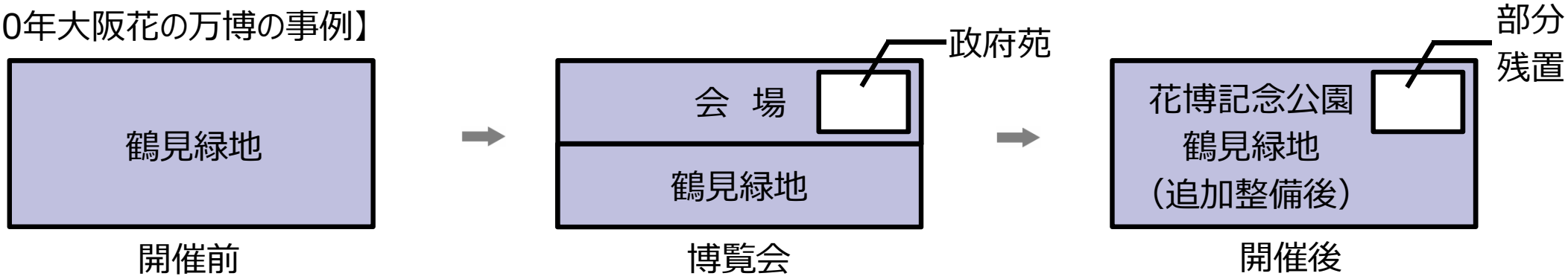
- 博覧会の趣旨に賛同する企業のビジョンを、特徴ある魅力を備えた庭園と共に表現し、新しい風景づくりを企業と実施

出典17-1）

■ 会場整備の事業構造



【1990年大阪花の万博の事例】



（仮称）旧上瀬谷通信施設公園　基本計画（案）

出典19-1）

３．国際博覧会における日本国政府出展の概要

■ 国際博覧会における政府出展について

国際博覧会における政府出展

… 政府が主体となり、**博覧会の理念やテーマを踏まえ、諸課題解決への展望と日本の文化、産業、技術等を表現する**出展。

国際博覧会（国外）における政府出展

国際出展の１つとして、以下のような出展を行う。

①**開催国、開催地域とのつながり**を示す

②開催国、開催地域をはじめとする**日本のプレゼンス向上**

登録博
（2021ドバイ万博）

■博覧会テーマ
：こころをつなぎ、未来を創る

■政府出展テーマ
：Where ideas meet
-アイディアとの出会い-

認定博
（2022アルメーレ園芸博）

■博覧会テーマ：成長する緑の都市

■政府出展テーマ
：SATOYAMA Farm Garden

国際博覧会（国内）における政府出展

開催国政府の出展として、以下のような出展を行う。

①**博覧会の中核を構成**する

②**日本の施策に対する国民の理解と協力を得る**

登録博
（2005愛知万博）

■博覧会テーマ：自然の叡智

■政府出展テーマ（キーメッセージ）
：つなぎ直そう。人と自然

認定博
（1990大阪花博）

■博覧会テーマ：自然と人間の共生

■政府出展テーマ
：21世紀における人間と花・緑とのかかわりを求めて

【参考】国際園芸博覧会（Bランク以下）における出展

2000淡路花博、2004浜名湖花博

・出展の形態はとらず、特別協力として関与

日本国政府出展の系譜（国内における国際博覧会）

《時代背景》戦後の高度経済成長を経て、経済文化の国際交流が活発化

《国の政策推進》所得倍増計画（1960年）、東京オリンピック（1964年）

1970 大阪万博（テーマ：人類の進歩と調和）

■政府出展テーマ：日本と日本人

- 日本文化の発展、現代日本の産業、生活、文化、21世紀の日本など、日本の進歩を力強く打ち出す。

《時代背景》沖縄が日本復帰（1972年）

《国の政策推進》沖縄の振興、開発の推進

1975 沖縄海洋博（テーマ：海－その望ましい未来）

■政府出展テーマ：黒潮に生きる（海洋文化館のテーマ）

- 日本にとって海とは何か、日本における海洋文化とはどのようなものかを問いかける。

《時代背景》自動車生産台数世界１位（1980年）、中央自動車道全線開通・東北/上越新幹線開業（1982年）

《国の政策推進》科学技術立国の推進（筑波研究学園都市の概成）

1985 つくば科学万博（テーマ：人間・居住・環境と科学技術）

■政府出展テーマ：人間の側から科学技術を発想（テーマ館のテーマ）

- 日本の風土・歴史・文化に着目、日本人と科学技術の関わり合いを示す。
- 日本人の科学技術への取組の現状・未来への展望を示す。
- 国民、特に青少年が体験、科学技術の知識を深める。

《時代背景》都市化の進展による都市部の緑の喪失　生活環境の悪化、健康への悪影響

《国の政策推進》緑の３倍増構想（1984年）

1990　大阪花の万博（テーマ：自然と人間の共生）

■政府出展テーマ：　21世紀における人間と花・緑とのかかわりを求めて

- 博覧会が目指す理念を広く理解してもらう先導的役割。
- 花と緑にかかわる日本の歴史や文化、生活・産業等を全般にわたって紹介することによって、日本における花と緑の現況に対する理解と協力を内外に促す。

《時代背景》地球環境問題、資源問題等の深刻化

《国の政策推進》循環型社会形成推進基本法（2001年）等

2005　愛知万博（テーマ：自然の叡智）

■政府出展テーマ（キーメッセージ）：つなぎ直そう。人と自然

- 日本独自の伝統と最先端の技術で、人類と自然が共に栄える真に豊かな時代を提案。

《時代背景》持続可能性の取組、価値化の多様化

《国の政策推進》SDGs、Society5.0　　等

2025　大阪・関西万博（テーマ：いのち輝く未来社会のデザイン）

■政府出展テーマ：いのちと、いのちの、あいだに　–Between Lives-

- いのちの尊さや互いに支え合っている存在であることを自覚し、社会課題を自分たちのこととして咀嚼し、未来社会のつくり手としての行動変容を促す。

2027　国際園芸博覧会（テーマ：幸せを創る明日の風景）

出典一覧

出典4-1）写真(2点)：アンタルヤEXPO2016HP http://expo2016-antalya.blogspot.com/(2022年12月1日閲覧)

出典4-2）図：BIE HP https://www.bie-paris.org/site/en/1990-osaka (2022年12月1日閲覧)

出典5-1）図：BIE HP https://www.bie-paris.org/site/en/2012-venlo (2022年12月1日閲覧)

出典5-2）図：BIE HP https://www.bie-paris.org/site/en/2016-antalya (2022年12月1日閲覧)

出典6-1）写真(３点)：(財)国際花と緑の博覧会協会「国際花と緑の公式記録」

出典7-1）写真(３点)：EXPO2022フロリアードHP https://floriade.com/en/ （2022年12月1日閲覧）

出典9-1）図： 横浜市HP https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/engeihaku/top.html
（2022年12月1日閲覧）

出典9-2）図：（一社）２０２７年国際園芸博覧会政府出展計画協会「２０２７年国際園芸博覧会基本計画案」
https://expo2027yokohama.or.jp/about/plan/（2022年12月1日閲覧）

出典一覧

出典11-1）図：農林水産省・国土交通省「横浜国際園芸博覧会具体化検討会報告書概要版」

出典13-1）図：旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会「旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案＜答申＞」を基に作成

出典14-1）図：Esri, DigitalGlobe, GeoEye, Earthstar Geographics, CNES/Airbus DS, USDA, USGS, AeroGRID, IGN, and the GIS User Community を基に作成

出典15-1）図：Esri, DigitalGlobe, GeoEye, Earthstar Geographics, CNES/Airbus DS, USDA, USGS, AeroGRID, IGN, and the GIS User Community を基に作成

出典15-2）図：横浜市HP https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/jokyo/sonota/kamiseya/kamiseysa.htmlを基に作成（2022年12月1日閲覧）

出典16-1）図：（一社）２０２７年国際園芸博覧会政府出展計画協会「２０２７年国際園芸博覧会基本計画案」https://expo2027yokohama.or.jp/about/plan/（2022年12月1日閲覧）

出典17-1）図：（一社）２０２７年国際園芸博覧会政府出展計画協会「２０２７年国際園芸博覧会基本計画案」https://expo2027yokohama.or.jp/about/plan/（2022年12月1日閲覧）

出典19-1）図：横浜市HP「（仮称）旧上瀬谷通信施設公園　基本計画（案）」